

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370076

研究課題名(和文) 東インド仏教の衰亡とイスラーム台頭の研究 宗教ダイナミズムを中心に

研究課題名(英文) A study on the reason of declining of Buddhism and raising of Islam in East India

研究代表者

保坂 俊司 (hosaka, shunji)

中央大学・総合政策学部・教授

研究者番号：80245274

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：従来の研究では、東インドにおける仏教の衰退とイスラームの伝播、発展という現象は、個別に検討されることが多かった。それゆえに、仏教とイスラームという二つの宗教の連続性に関しては、余り大きな関心を払われなかった。しかし、東インド地域での仏教の衰退とイスラームの台頭は、密接な関係がある。この歴史的事実としての宗教の変動を、思想的な側面に焦点を当て明らかにした。

というも中央アジアで、9～12世紀に確立されたイスラーム神秘主義の存在が、東インドにおける仏教からイスラームへの改宗を個人的にも集団的にも容易にしたという結論を得た。この結論は、更にイスラームの東南アジアへの展開にも言えることである。

研究成果の概要(英文)： In the previous studies, the decline of Buddhism and the development of Islam in East India were usually considered respectively. Hence, researchers have not paid enough attention to the sequence between Buddhism and Islam. However, the decline of Buddhism and the rise of Islam in East India are closely related. I clarified the religious changes as historic facts focusing on the philosophical aspect. Therefore, I reached a conclusion that Sufism, which have already been established in Central Asia from the ninth through twelfth centuries, made it easier to convert to Islam from Buddhism individually and collectively in East India. This conclusion can be applied to the expansion of Islam to Southeast Asia.

研究分野：宗教学、インド思想、文明論、

キーワード：インド仏教の衰亡 インド・イスラームの台頭 中央アジアの文明交流 仏教とイスラームの思想融合
ヴィクラムシラ寺 仏教とヒンドゥー教の対立 イスラームの野蛮と文明 東南アジアへの連続性

1. 研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者である保坂が、30年来研究としてきたインド・仏教の衰亡研究、特にイスラームとの関係を、同テーマの中心に置いた、世界的見ても新しいテーマ設定によってなされた研究の一環であり、いわばインドにおける仏教興亡史研究における独創的な研究分野を開くものである。しかし、このテーマは、宗教学的、インド学的、そして何より仏教研究において重要にもかかわらず、筆者を除いては、国内外において、このテーマに取り組む研究者は育っていないか、余り注目される成果は表れていない。

その理由は、まず同テーマが当該地であるインド、あるいはバングラデシュなどの地域の研究者において関心を喚起するテーマとなっていないという点がある。なぜなら、当該地域は、ヒンドゥー教地域では、仏教はヒンドゥー教の一部であるとして、その独立的存在に対して宗教・ナショナリスティックな視点も含めて敢えて問題提起しないようであり、またイスラーム側においては、殆ど考察の対象にすらなっていないのが現状である。

そのような地域社会の宗教的、あるいは学術的な背景と、特に日本や欧米の仏教研究者の研究が文献研究に偏っている現状との相乗的な理由で、インド仏教の衰亡という歴史的な現象の研究は注目度の低いテーマとなっていたと思われる。

ところで、現在の南・中央アジア・東南アジアにおいては、かつて仏教の隆盛した地域、特に大乘仏教が、殆どイスラーム化し、またヒンドゥー教の地域になっている。この時に、仏教と同根異樹のヒンドゥー教との関係は、容易説明がつくのであるが、仏教とまったく接点を持たないイスラームとの関係は、従来の研究では、「イスラーム勢力による暴力的な改宗政策による」などの定式化された説明で、深い研究はなされてこなかった。

さらに、21世紀におけるイスラームの世

界的な台頭という現象を考えると、また、仏教というイスラームから見ると多神教(カーフィル)の宗教との関係が、今後どのような経過をたどってゆくかを考えるためにも、その歴史的、更には宗教史、宗教思想、考古学などの成果を総合的に考えることは、極めて重要であると思われる。

少なくともその要請は、単に仏教学、インド学、宗教学あるいは歴史学のみならず、社会科学の国際政治、国際関係の諸学などの研究にも基礎的な考察史料を与えることになる。特に、諸宗教の平和共存の思想、あるいはその限界についての事例研究としてその成果が、これらの諸分野の基礎研究として求められている。

これらを加味して、インド仏教の衰亡、特に、最後のインドにおける仏教の興隆地東インド仏教の衰亡に関する研究には、文明論的な総合研究が求められる。

2. 研究の目的

前述のように、本テーマは、インド仏教史の研究領域のみならず、インド学、宗教学、あるいは文明論はもとより、更に研究領域を超えて、現在あるいは近未来の国際社会を考えるうえで、極めて興味深いしさを与えてくれるテーマである。つまり、イスラームの拡大によって、どのような社会的、あるいは国際関係における変化が生じつつの科、ということを経史史料などから明らかにできるという意味で、単なる過去の東インド仏教の衰亡という歴史的な事実の事例研究に止まらない、現代的な意義のあるテーマでもある。

もちろん、その基本は仏教という普遍宗教の仏教が、何故、どのように東インドにおいて、衰亡したかについての研究である。今回は、従来ほとんど史料が見当たらないかった同地域の仏教の衰亡に関して、考古学的な発掘資料のみならず、他の地域の仏教からイスラームへの宗教変容(改宗)現象の比較を通じて、この現象を総合的、つまり文明論的

に検討することを目指した。特に、本テーマにおけるスーフイズムの果たした役割について着目した。

いずれにしても、中国文献、発掘された碑文、イスラームの資料など本テーマに関連すると思われる文献史料のみならず、同じく仏教からイスラーム教へと宗教が変貌した、中央アジアとのスーフイズムが、仏教の滅亡とイスラームの拡大、つまり民衆のイスラームへの改宗に如何なる役割を果たしたかを中心に、思想的な仏教とスーフイズムとの思想的な連続性と非連続性について、考察する。

またこのテーマは、更に東インドと同様に仏教とヒンドゥー教の混交地域であった東南アジアがなぜイスラーム地域に変貌したのかという点について検討する基礎研究として、今後の研究に発展させたい。

いずれにしても、本テーマは、宗教の変容、特にイスラーム教の拡大という現象が、どのようなメカニズムで成り立ち、またその結果がどのような文化的、更には文明的な変化をもたらしたかという、いわば文明論的な、そして更に言うならば、21世紀において顕著となってきたイスラームの復興と拡大という古くて新しい現象を如何に考えるかの絶好のサンプル研究とする。

既述のようにイスラームとは宗教構造が大きく異なるヒンドゥー教や仏教などの、彼らがカーフィル(多神教徒)と呼ぶ宗教集団との関係性の研究は、今後の国際社会の未来を考えるうえで大きな歴史的な示唆を与えてくれる研究であるとの視点から、特に、東インドの仏教の衰亡とイスラームの台頭の関連性について、その平和共存思想という視点から明らかにする。

というのも、現在の当該地域は、結果としてイスラームが優勢であるが、その間数世紀にわたり仏教とイスラームの関係は、共生関係にあり、現在も中近東のイスラームとは一線を画す多神教徒と共生可能なイスラーム

社会を形成しているからである。

以上のように、本研究テーマにおいては、仏教の衰亡とイスラームの台頭という宗教変容を、多面的、つまり文明論的な視点から検討するものである。なぜなら、宗教が変わる、あるいは変えられるということは、実にそれを支え個々人の精神世界から日常文化、更には社会全体の変容に連なることであり、文化断絶さらには文明の断絶という現象を、客観的に検討することで、他地域の宗教変容と文化、文明の断絶現象との比較検討が可能となるのである。

東インド、バンクラデーシュ、そして中央アジア、更には東南アジアとのイスラームと仏教の連続と非連続の関係を視野に入れた研究の基礎研究としたい。

3. 研究の方法

研究方法としては、まず現地調査を行い、五感によってその現実を確認することを重視した。というのも、従来この種の研究は、文献の上での研究が主であり、実際に現地に足を運ぶことはあまり重視されなかった。しかし、まず、当該地域に赴き現地の研究者のみならず住民との交流、そして何により自然条件を肌で感じることを重視した。

それらを体験することで、文献の読みにおいても、独自の観点が見いだせるからである。その成果の一端は、「ヴィクラムシーラ寺院訪問記」(『在家仏教』)に述べておいた。

一方で、現地調査を通じて入手できる最新の情報、特に考古学的な情報や現地研究者との交流で得られる小さな情報、それらを集積し、また関連付けて考察することで、より現実に即した研究結果が得られることになる。

また、膨大な資料の読み解きには、かなりの時間も必要であり、またそれらを総合的に体系づける方法論も不可欠となる。

本研究では、資料的欠乏や先行研究の少

なさを補うために、比較文明学の手法を採用し、単なる文献資料や考古学的な資料の限界を超えて、つまり、資料によって語らせる的な手法では不十分な本テーマの解明に、地域との比較研究など類推や対比研究を通じて、現実との整合性を視野に、社会科学的な分野の研究法も採用してみた。

いずれにしても、本件研究は、単なる過去の歴史的な事象であるインド仏教の衰亡というテーマを、歴史的な事象として研究するのだけではなく、その今日的な意義を視野に入れて研究することを目指したものである。

その中には、イスラームによる紛争が多発する現在において、イスラームとの平和共存の可能性を見出す試みも含まれている。

4. 研究成果

今回の研究テーマの成果は大きく以下のようによまどめることができる。

まず、東インド仏教の衰亡に関する文献や資料分析の研究から明らかにできた部分である。この点は、今後漸次学会などで発表してゆくが、考古学的な資料分析を現在進行中である。その中には、従来あまり知られていなかったバングラデシュのルアヤバリ遺跡における仏教寺院からイスラームのモスクへの転用が明確に認められる遺跡によって、最初期のイスラームのインド侵攻を描いた『チュチュ・ナーマ』の「仏教寺院をイスラームのモスクに転用した」という記述を傍証するものとして注目させる。この点は、中央アジアウズベキスタンのサマルカンドにおける発掘調査においても、仏教寺院の基礎の上にモスクが建設されてことが明らかとなっている。この事実を単なる征服者の戦勝記念の蛮行徒のみ考えるのではなく、ここに宗教変容の現実を見ることが重要であるとの検討を行った。

この点に関連して、仏教徒イスラームとの連続と非連続の関係は、「イスラームと大乘

仏教」末木文美士・下田正弘他編集『大乘仏教のアジア』、あるいは「仏教とイスラーム教の連続と非連続」梅村 坦『中央アジアの現代的視座』において、その研究の一端を発表した。

詳しくはこれらの書物に譲るが、今回特に、中央アジアとベンガル・イスラームの関係性が、当該地域のイスラーム文献、伝承において強調されている点、また歴史的にも中央アジアのイスラーム勢力が当該地域を支配した点などから、両者の連続性に改めて着目してみると、イスラーム勢力、仏教勢力との間に、非常に近似した点を見出すことができ、このスーフィズムの成立と仏教、特に大乘仏教の影響関係に行き着くこととなった。余談ではあるが、更に、中央アジアにおける独特の文明融合の社会背景が、紀元前後においては、大乘仏教、特に浄土信仰や華嚴経の思想を生み、8～12世紀においては、イスラームと仏教などの宗教との融合から、スーフィズムを生んだという作業仮説を生んだ。その結果、従来あまり明確ではなかった大乘仏教の発生のメカニズムに関しても、同じく諸宗教、文明融和（混交ともいえるが）を志向する当該地域の文明的な特徴からより説得力のある仮説を導き出せた。この点は今後一層の検討を必要とする。

一方、この文明論的な視点をういれば、仏教とイスラームとの文明融合が、中央アジアにおいて9～12世紀に起こり、この仏教とイスラーム教の融合思想が生み出したといっても過言ではないスーフィズムが、インドのイスラーム化、特に仏教徒のイスラームへの改宗のハードルを低くしたという仮説が成り立つのである。

その結果、政治的、宗教的にはイスラーム一色になった中央アジアであるが、そこから生まれたスーフィズムの一派が、インドのイスラーム化に大きく貢献した、とい

う歴史的な事実と文献や考古学的な資料との連関から、従来の謎であった仏教からイスラームへの宗教変容の連続と非連続の関係の一端を説明できることとなった。

これらの検討から、改めて中央アジアにおける癒合文明の存在に着眼した。つまり、中央アジアにおいては、西側文明とインド文明、そして既存の文明、時に中国文明も融合し、独自の思想・宗教形態を形成する。そのパターンが、つまり紀元前2世紀以降の大乗仏教の思想であり、紀元後10世紀前後のスーフィズムの形成である。そして、それらは、中央アジアのメガオアシスと報告者が呼び、サマルカンドやブハラなどのオアシス都市特有の文明形態であり、そこから生まれた思想・宗教の類似性を平行的に比較検討することで、仏教からイスラームへの改宗のハードルが低くなったという結論である。

そして、この点において、イスラームと仏教やヒンドゥー教との平和的な共生や、思想的な融合の可能性という、21世紀の国際社会において最重要課題の一つである。イスラームと非イスラーム、特に多神教徒との平和的共存の可能性を示す研究の端緒が開かれたとも考えている。

その成果は、一般向けの図書であるが拙著『格差拡大とイスラーム教』(プレジデント社)において、論じた。

また、このスーフィズムの思想確立における仏教思想の融合という視点は、原理主義的なイスラームとは異なる寛容、融和的なイスラーム思想の可能性を明らかにするものでもある。

さらに言えば、当該地域のイスラームの展開の研究により、東南アジアにおける仏教から、イスラームへの宗教変容の要因かなりの程度明らかにすることができる。

つまり、東シンドから伝播定着した仏教やヒンドゥー教の第二として、これらと親和

性のあるスーフィズムが東南アジアに伝播し、かつてと同様に、新しい宗教運動として、仏教やヒンドゥー教から、イスラームへと宗教が容易に変えられた、というそのメカニズムを仮説的ではあるが、説明できるように思われた。この点は、今後の研究を通じてさらに明確化する。

いずれにしても、本研究では本テーマの研究に、伝統的な人文学領域に加え、社会科学のアプローチ、つまり経済学や政治学の視点も活用した、その成果の一端は『エコノミスト』誌にも掲載した。

総じて、個人の研究ではあったが、その成果は、中央アジア、インド、東南アジアへと広がるイスラームベルト形成のメカニズムの解明に一步近づいた成果を得ることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(以下はすべて、研究代表者保坂俊司の業績)

[雑誌論文](計 5件)

保坂俊司「宗教と経済の理解には他者への共感が欠かせない」『改革者』2016年6月号、政策研究フォーラム10~15頁、査読無し

保坂俊司「ヴィクラムシーラ寺『在家仏教』40~49頁、2016年6月号、査読無し

保坂俊司「中村インド学の継承と問題点」『印度学仏教研究』1058~1064頁、2014年3月、査読有り

保坂俊司「文明史的大変動期における宗教の意義」『世界平和研究』2014年夏季号 9~16頁、査読無し

保坂俊司「対談宗教と経済」『エコノミスト』2013年10月22日号など3篇、査読無し

他多数

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計 5件)

保坂俊司「仏教とイスラームの連続と非連続」梅村 坦『中央アジアの現代的視座』中央大学出版会 1 - 54 頁 2016 単著 保坂俊司『格差拡大とイスラーム教』プレジデント社 2015 年 194 ページ。

保坂俊司「比較宗教講座」『比較宗教』洋泉社、2015 年(10 回の講義)

保坂俊司「紛争を超える思想をおもとめて」『文明の未来』(東海大学出版 2014 年 248~267 頁

保坂俊司「大乘仏教とイスラーム」『大乘仏教のアジア』(シリーズ大乘仏教)(春秋社) 130~166 ページ。2013 年

〔その他〕

ホームページ等

<http://s-hosaka.weebly.com/>
中央大学総合政策学部教員紹介の
ホームページ上に、研究成果を発表中。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

保坂俊司 (Hosaka, Shunji)
中央大学・総合政策学部・教授
研究者番号: 80245274